

『劇団FAX版 桃太郎』作・玉井秀和

■登場人物

- 1、桃太郎
  - 2、幼馴染
  - 3、桃太郎の父
  - 4、幼馴染の父
  - 5、Youtuber 1
  - 6、Youtuber 2
  - 7、船頭さん
  - 8、ホームレス 1
  - 9、ホームレス 2
  - 10、ホームレス 3
  - 11、ホームレス 4 (ガンちゃん)
  - 12、シンガーソングライター
- 鬼 (1〜3)
- 村人 (1〜3)

S1・桃太郎と幼馴染Aちゃんのボーイミーツガール。

自転車で川辺を走っている。

恥ずかしがり屋の桃太郎。ちよつとイケイケの幼馴染。桃太郎は自分なんかが、と思って  
いるのかもしれない。

河原をジョギングしているおじさん。「あついねえ」「二人乗りやめときやー」とかとか。

A「ねえ」

桃「・・・」

A「ねえ」

桃「なんだよ」

A「カバン邪魔やねんけど」

桃「そんなんしゃあないやろが」

A「かごに入れたらええやんか」

桃「アホかお前。かごには大根が入っとるやろが」

A「大根、カバン中に入れたらええやん」

桃「お前、汁が教科書についたらどないすんねん」

A「使ってないやろ」

桃「今使ってないだけで、テスト前には使うんじゃ、ボケ」

A「前も同じこと言っとった」

桃「前、言っとったんは、1つ飛ばして今回のことじゃ」

A「1つ飛ばして？」

桃「当たり前じゃボケ。一寸先は闇じゃ」

A「先見の明じゃボケ」

桃「ボケちゃうわ」

A「っていうか何？ 大根で。なんで大根買うん？」

桃「しょうがないやろ晩飯に食うんやから」

A「帰ってからスーパーに行ったらええやんか」

桃「効率悪いやろが」

A「購買のおばちゃんもびっくりしとったで。昼休みに大根買うやつ初めて見たって」

桃「アホかお前。売れるから置いとるんやろが」

A「購買で売れへんやろ大根」

桃「じゃあなんで売ってるんですか」

A「アホが買うんやろ」

桃「誰がアホじゃボケ！（自転車めっちゃ揺らす）」

A 「アホやめろアホ！」  
桃 「あ、警察」

自転車から飛び降りる二人。歩いてました感を出す。(※歴史の年号とか暗記してみたり)  
警察が通り過ぎたら、また自転車に乗る。

A 「そういえばさ」

桃 「ん？」

A 「鬼ヶ島行くんやって？」

桃 「え」

A 「鬼ヶ島、行くんやろ？」

桃 「お前それ誰に聞いたんや」

A 「え、お父さん」

桃 「え、おっちゃん？」

A 「昨日、桃ちゃんパパと飲んでたんだって」

桃 「親父い」

A 「ほんまなん？」

桃 「おん」

A 「なんで？」

桃 「なんでってなんだよ」

A 「え、だってさ、危ないやん」

桃 「え、でも行くだろ。桃太郎なんだから」

A 「名前だけやん」

桃 「お前、俺、桃から生まれとるねんで？ そりゃ行くやろ」

A 「桃から生まれたとしてもやろ」

桃 「桃から生まれたら必然的に鬼ヶ島いくやろ」

A 「いかん」

桃 「いく」

A 「いかん」

桃 「いく」

A 「いかん」

桃 「いく——」

ジヨギングのおじさん、大根を取っていく。

桃 「え、あ、ちょっと！」

A 「なになに！」

桃 「大根！ 大根とられた！」

A 「ちよつとちよつと前前！」

桃 「大根！」

A 「前みいや！ アホ！ 危ないやろが！」

桃 「だいこーん！」

落ち込む桃太郎。

A 「ええやろ大根くらい」

桃 「あかんわ。勉強しながら何食ったらええねん」

A 「チョコやろ」

桃 「大根やろ」

A 「え、大根食うん？」

桃 「あたりまえやろ」

A 「え、キモ」

桃 「キモくないわアホ」

やや間

桃 「で、なんや？」

A 「なにが」

桃 「鬼ヶ島行くからなんや」

A 「なんでもないわ」

桃 「あれやろ？ 心配してくれてるんやろ？」

A 「は？ アホこじらせて死ぬや」

桃 「じゃあなんなんや」

A 「あれや。チャリ乗っけてくれる人いないと不便やな、思っただけや」

桃 「え、貸そか？」

A 「ん」

桃 「要るんやろ、自転車？ 俺、鬼ヶ島行ってるあいだ使わんし、全然貸すで」

A 「ん」

桃 「え、なに？」

A 「んーん。じゃ、借りるわ」

桃 「え、ちゃんと鍵かけてな？」

A 「なんでやねん」



桃「ただいま」

親父、出てくる。酒臭い。もう出来上がっているのだろう。ニコチン中毒のお父さん。

桃「あ、ちょっと親父」

親父「ん？ なんや？ 彼女でもできたんか？」

桃「それはできてない」

親父「なんや、できとらんのか。俺がお前くらいの時には、もう、それはそれは多くのおなごと遊んどった」

桃「そんな話はええんや」

親父「とくにマユミちゃんなんかは、いいとこのお嬢さんでな」

桃「そんな話はええねん。親父さ——」

親父「まあ、座んなよ」

やや間

親父「なんや」

桃「いや、だからさ親父——」

親父「あ、そういえばそろそろか」

桃「ちよっと」

親父「そろそろやんな？」

桃「なにがや」

親父「え？ お前が、桃から生まれたってのが、俺のジョークだって打ち明けるの」

やや間

桃「まだだよ」

親父「あ、まだ？」

桃「うんうん。まだまだ。まだ、全然その時期じゃない」

親父「そうか。すまんすまん。で、何？」

桃「、、、」

親父「ん？」

桃「ん」

親父「ん？」

桃「ん」

親父「え？」

桃「え」

親父「え、なんか、話があるんだろ？」

桃「え、ちょっと待ってちょっと待って」

親父「なんだよ」

桃「俺、桃から生まれてないん？」

親父「当たり前やろが」

桃「え、俺、桃から生まれてないん？」

親父「おまえ、ええ年になって自分をなんやと思っとったんや」

桃「え、俺、桃から生まれてないん？」

親父「当たり前やろが。アホかお前」

桃「え、じゃあ何から生まれたん？」

親父「そりゃ母さんからだよ」

桃「え、俺、桃から生まれてないん？」

親父「母さんからや」

桃「え、桃じゃないん？」

親父「母さんからやって」

桃「うそや。桃からや」

親父「お前どうやって桃から人が生まれるんや」

桃「桃割ったら出てきたんやろ？」

親父「んなわけあるかい」

桃「え、桃やろ？」

親父「母ちゃんや」

桃「桃！」

親父「母ちゃん！」

桃「桃！」

親父「母ちゃんや！」

桃「嘘だ！」

親父「嘘ちやう」

桃「嘘だって言ってくれよ！」

親父「だから、今まで嘘ついてたんだって言ってるんだらう」

桃「嘘だろ」

親父「ああ、嘘だよ」

桃「え、嘘なん？」

親父「お前が桃から生まれたたつてのは嘘だよ」説明すぎるか？

桃「え、え、え、どっちなん？ 俺は何から生まれたん？」

親父「母ちゃんだ」

桃「うわあああああああ」

親父「おい、どうした」

桃「なんで、そんな感じでいられるんだよう」

親父「え」

桃「なんかもっとあるだろ。もっとやるのがさ」

親父「え、あ。ごめんなさい」

桃「頭をあげてくださいよう。頭だけは、頭だけはあげてくださいよう。みじめだから。俺、みじめだから」

親父「ごめん」

桃「ごめんイヤア。ごめんだけはイヤア」

親父「すまん」

桃「ひやあああああ！」

桃太郎、身体がすさまじい方向にねじれて崩れ落ちる。

桃「どんだけ、どんだけ苦労したと思っただよ。この名前でもんだけ苦労したと思っただよ」

親父「ごめん。ごめん。ごめんよう」

桃「あだ名だつてさあ、あだ名だつてキングボンビーだよ？ なんだよキングボンビーって」<sup>8</sup>

親父「キングボンビーは桃太郎電鉄の貧乏神のキャラクターやんか」

桃「そういうこと言っとるんちゃうねん」

親父「キ〜〜〜ングボンビー。俺様はボンビラスの世界からやってきた。(桃「親父、」)ボンビラスの世界ではお金などいらぬのだ！ 俺様が捨ててやる。サイコロを10個ふって出た目の合計で金額を決めてやるぞ！ サイコロを振るがいい！」

桃「えいっ」

親父「2億7千万円捨ててやるぞ。喜べ！ ゲェツヘツヘ」

桃「やめろおおおお！」

親父「あ、あと、桃から生まれたつて言うアイデンティティを捨ててやるぞ。喜べ！」

桃「やめろお！ 俺からアイデンティティを奪っていかないでくれえ！」

親父「ゲェツヘツヘ」

桃太郎、泣き崩れる。

桃「くそ。くそ。俺のアイデンティティが。桃太郎であるための必要条件が」

父、泣き崩れる。



桃「なんなんだよ。意味わかんねえよ。なんで、親父が泣いてるんだよ」

親父「俺だって意味わかんねえよ！でも意味分かんないことだらけじゃん、人生って！」

桃「人生ってなんだよ。人生って何なんだよ」

親父「しらねえよお。俺がききてえよお。人生って何なんだよ」

桃「あー今までの俺の人生はなんだったんだろ。え、俺って桃から生まれて、」

親父「ない」

桃「んだよねえ。そうだよねえ。桃太郎が桃太郎であるためのアイデンティティを失った今、俺はこの先、どうやって生きていけばいいんだろう」

親父「とりあえず鬼退治に行きなさい」

桃「その自信ねえよお。桃から生まれてなかった今、もう自信をもって鬼ヶ島に行けねえよお」

親父「え、でも俺いろんな人に言っちゃったよ？うちの太郎は鬼退治に行くんだって」

桃「太郎って呼んじゃってるよ。太郎は桃から生まれてねえよ」

親父「お前は、戸籍上は、立派な桃太郎だ、よ？」

桃「もう戸籍上の話になっちゃったよ」

親父「いいじゃん。戸籍上だって。いいじゃん。戸籍上だって」

桃「よくねえよお」

親父「そうだ。戸籍上はお前は立派な桃太郎だ。自信をもって鬼ヶ島にいきなさい」

桃「いや、ちょっと、散歩くるわ」

桃太郎、家の外に出る。

ガンちゃん「女の子に告白もできんようなやつは、一丁前ちゃう。二丁拳銃や。かつこええ。かつこええよ二丁拳銃」

(転換)

S3 取材の人に写真撮られるシーン

桃太郎が家を出たとたんにシャッターの音。

YとT

Y・T「チェキ〜！今日も頑張っていきましよう」

Y「さ！今日の動画は、(T「デデン！」)『話題の桃太郎さんに電撃突撃インタビュー！』」

(T「よっ」)こちらが鬼ヶ島に行くと人気沸騰中の桃太郎さんでございます！ (T「ヒ

ユ一「率直にどのようなお気持ちですか？」

桃「え、誰？」

Y・T「チェキ〜！」

桃「いや、知らない知らない！ 有名？ 結構有名？」

Y「最近結構人気てきたなって感じっす。桃太郎さんも、今、人気沸騰中っすけど、俺らも、今、人気沸騰中っす（T「イヨッ！」）」

桃「え、何人？ 登録者数何人？」

Y「（聞こえない）っす」

桃「え、なんて？」

Y「34人っす」

桃「しつかり底辺じゃん！」

Y「底が深すぎてアルゼンチンまで行っちゃってるぜ（T「アルゼンチンの人きこえますか〜）」

桃「うん。こりゃ底辺だ！ しつかり底辺だ！」

Y「おー辛口！ 辛口スパイシーカレー！（T「流行ってるう〜）」

桃「そっちの人の合いの手いらないんじゃない？」

Y・T「……（二人で桃を見つめる）」

桃「…、ごめんて」

Y「さ、本題に入っていきたいと思います！ ぶっちゃけ鬼ってどっすか？」

桃「鬼っすか？」

Y「鬼ヶ島い鬼退治に行くらしいじゃないっすか」

桃「正直、あんま自信なくて」

Y「桃太郎さんでも鬼に勝てるかどうかは分からないと」

桃「いや、というか桃太郎であることに自信がなくなったというか」

Y「つまり？」

桃「なんか桃太郎じゃなかったというか」

Y「というと？」

桃「桃太郎は桃太郎なんですけど、でもそれは戸籍上の話であって、実際のその本質的な部分では、桃太郎じゃなかったっていうか」

Y「そして？」

桃「えーで、アイデンティティを失ったというか」

Y「と、いう事は？」

桃「と、いう事は？」

Y「つまり？」

桃「え、さっきからなんか雑じゃないっすか？」

Y「というと？」

桃「それもさっき使いましたよね！ さっきも「つまり？」のあと」というと？」でしたよね！」

Y「そして？」

桃「ほら！ 一緒！ さっきと一緒！ ボキャブラリーが終わってるんすよ！」

Y・桃「と、いう事は？」

桃「ほらあ！ 「と、いう事は？」ってなに？」

T「あ！」

桃「うわあ、なに、急に！」

T「すんません。容量いっぱいになっちゃいました」

Y「テープチェンジしよう」

桃「テープではなくない？」

T「すみません。「つまり？」からやっていただいてもいいですか？」

桃「いる？ さっきのくだりいる？」

Y「つまり？」

桃「あ、もう入ってる？ 入っちゃってる？ それとも単にあおってる？」

Y「というと？」

桃「入っちゃってるね。これ入っちゃってるね」

Y「そして？」

桃「えーで、アイデンティティを失ったというか」

T「あ、すみません。それ1回目の「つまり？」ですよ」

桃「え、あ、はい」

T「2回目の方からで」

Y「なんで1回目やっちゃうかな」

桃「2回目いる？」

Y「流れがあるんで」

桃「ないでしょ」

Y「つまり？」

桃「、、え、さっきからなんか雑じゃないっすか？」

Y「というと？」

桃「それもさっき使いましたよね！ さっきも「つまり？」のあと」というと？」でしたよね！」

Y「そして？」

桃「ほら！ 一緒！ さっきと一緒！ ボキャブラリーが終わってるんすよ！」

Y・桃「と、いう事は？」

桃「ほらあ！ 「と、いう事は？」ってなに？」

Y「以上、本日のゲストは桃太郎さんでした！ 少しでもこの動画がおもしろいと思った人

は高評価・チャンネル登録よろしくお願いします!」

シャッター音。静止する三人。

S 4 盛り上がる親父たちのシーン

A 父「ほら! これ桃ちゃんやろ」

親父「ほんまや、太郎や」

A 父「せやろ」

親父「それにしてもこんなよう見つけたな。20人しか見とらんで」

A 父「ゆうきが見つけてきたんや」

親父「凄いなAちゃん」

A「なんか、youtube 見たら、たまたま」

A 父「ほんまかいな。どうせ桃ちゃんのこと検索しよったんやろ」

A「ちゃうわ。オススメに出てきたんや」

親父「20人しか見とらんのか?」

A「せ、せや」

A 父・親父「あらへんあらへん有馬記念」

A「かってにやっというてー」

A 父「20人しか見とらんのにオススメに出てくるなんて、そんな、Google さんも大したもんやわ」

親父「ゆうきちゃん。握られとるぞ。GAFaに情報握られとるぞ」

親父たちは「GAFa、GAFa」と笑いだす。

A「ホンマやかましわあ」

A 父「なにすねとんねん。桃ちゃんええ男やんか」

親父「いやいや、うちの太郎なんてゆうきちゃんに比べたら全然ですわ」

A 父「それはせやねん。やっぱそう思うか?」

A「父ちゃんやめえや」(以下カット)

親父「ゆうきちゃんと太郎なんて、くらべちゃあかんですわ」

A「桃ちゃんパパも思っとらんことを」

A 父「いやいや、俺もな、そう思うねん。ゆうきはしっかりしとるなあて。わしらの間に生まれたとは考えられんほどしっかりしとんねん。異常気象や」

A「突然変異な」

親父「いやいや。教育がしっかりしとったんですわ。うちの太郎なんか、ピグレットですか

ら」

A 「ピグレット?」

A 父 「そんな事ないですわ。桃ちゃんもああ見えてしっかりしてるところあるよ」

A 「通じてる!?!」

親父 「いやあ、外ではいい顔してるんでしょけど。家ではそれはもうピグレットですわ」

A 父 「家ではみんなそうちゃうか?」

A 「ピグレット?」

親父 「休日なんてずっと寝とるんでっせ? ピグレットでしょう」

A 父 「それはピグレットやなあ」

A 「え、プー? もしかしてプー?」

親父 「風呂入らんでええんか、言うても「イーヨー」っていうだけで (A 「イーヨー」、しまいには扉に手をはさんで「ティガー! (手が) ティガー!」言うてますわ」

A 「あ、絶対プーや」

親父 「もうね。ゆうきちゃんとはね比べるまでもない。バランスが取れませんわ。天秤にかけたらこうですわ (傾く)」

A 父 「だいぶ傾いとりますなあ」

親父 「つり合わせるためには2トン必要ですわ」

A 父 「いやあ、2トンで足るか?」

親父 「いやパパさん。2トンは2トンでもヒノノニトンでっせ」

A 父 「ヒノノニトンか! そりゃスゴいわ」

親父 「トントントントン、ヒノノニトン。トントントントン、ヒノノニトン (途中からA父も入ってくる)」

一文カット

親父 「ほらAちゃんも」

A 「ええ」

みんなで、ヒノノニトンする。なんなら幕裏の人たちも出てきてヒノノニトンする。

次のシーンの人々を残してはける。

S 5 ホームレスたちとの出会いのシーン

中央サス。

桃「村の人たちが、なんでかよくわからないけどヒノノニトンで盛り上がっている時、俺もなんでかよくわからないけど、鬼ヶ島に向かっていた。ちよつとした散歩のつもりだったからお金も武器も、何も持ってきてなかった。なんならアウターも忘れた。少し暖かくなって

きたとはいえまだ肌寒い！　っていうかご飯忘れた。これはまずい。そう思って必死に探したポケットの底には、いつのものかわからない食べかけのチューインガムが入っていた。そろそろ羽化するであろう草むらの虫たちよりも先に、腹の虫が鳴いた」

空腹の音。

気がついたら周りにはホームレスが寝ている。

- 1 「(腹の音に対して) なんやうるさいなあ。誰やアラーム鳴らしとるん」
- 2 「俺ちゃうで」
- 3 「はよとめえや」

空腹の音、とまる。

- 1 「ん？　なんや兄ちゃん」
- 桃「え」
- 1 「炊き出しか？」
  - 2・3 「え、炊き出し？」
  - 1 「炊き出しか！　炊き出しだ」
  - 2・3 「炊き出しだ」

ホームレス。桃太郎のもとに集まる。

- 桃「あ、違います！　炊き出しじゃない！　炊き出しじゃない！」
- 1・2・3 「なんや。炊き出しちゃうんか」
- 桃「なんか、ごめんさい」
- 2 「なんや兄ちゃん。県か？」
- 桃「え？」
- 2 「県のもんか？」
- 桃「いえ」
- 3 「区か」
- 桃「いえ」
- 1 「市か」
- 桃「それそんな大事なんですか？」
- 2 「当たり前やろが。自己紹介もせんと入って来よってに」
- 桃「すみません。桃太郎って言います。ちょっと今ふらっと散歩してて」
- 3 「桃太郎ってあの桃太郎か」

- 桃「あ、いえ、戸籍上だけで」
- 1 「あ、どっかで見たことある思っと思ったら、あれや〇〇チャンネル(youtuberのアカウント名)にでとった桃太郎や」
- 2 「あ、ほんまや」
- 3 「あれか？ 鬼ヶ島に行くって言う」
- 2 「せやせや」
- 桃「こんなところにチャンネル登録者が」
- 1 「ホンマかあれ、鬼ヶ島に行くって」
- 桃「え、いや」
- 3 「行かんのか」
- 桃「んー」
- 2 「なんやはつきりせえへんなあ」
- 桃「すみません」
- 1 「もつと自信もちいや」
- 桃「はい」
- 2 「行くんか」
- 桃「まあ」
- 1 「その格好で行くんか」
- 2 「完全に観光装備やんか」
- 1 「あかんあかん。危ないで」
- 3 「段ボールやるわ。ちよつと待つとき」
- 桃「あ、ありがとうございます」
- 1 「あ、じゃあブルーシートも持ってき。多少は雨風しのげるわ」
- 桃「なんかすみません。皆さんは大丈夫なんですか、こんなもらっちゃって？」
- 2 「大丈夫やろ、俺らアルソック入つとるし」
- 桃「え？ アルソック入ってるんすか？」
- 2 「せやで」
- 桃「え、この家アルソック入ってるんですか？」
- 1 「呼んだら吉田沙保里くるで」
- 桃「え、吉田沙保里くるんすか？」
- 3 「前までは現役やったからあれやったけど、もう引退したからすぐ来るで」
- 桃「吉田沙保里が？」
- 2 「こないだもなあ、イノシシが出たんで呼んだんよなあ」
- 桃「吉田沙保里を？」
- 1 「ありゃ凄かった」
- 3 「イノシシ相手にバックとってグルんよ」

桃「吉田沙保里だ」

1 「目からビームも出すしなあ」

桃「吉田沙保里か？」

3 「そこらへんが拓けてるのも、その時の戦いの名残やで」

桃「ほんとに吉田沙保里？」

2 「タツクルも早くて見えん見えん」

桃「吉田沙保里だ」

1 「安心安全やな」

2・3 「せやなあ」

桃「そうっすねえ」

お腹が鳴る。

1 「なんや、またアラームか」

2 「俺ちゃうで」

1 「スヌーズするやつが一番うっとおしいんじゃ」

3 「だれや」

桃「あ、すみません」

2 「なんや兄ちゃんアラームか」

桃「いや、あの、お腹がすいちゃって」

一同、大爆笑。

1 「なんや今の腹の虫だったんか」

2 「とんでもない音なっとなで」

桃「すみません。なんも食ってなくて」

1 「誰でも腹は減るもんなあ」

3 「なんかあったかなあ」

桃「あ、いいですよそんな」

3 「お、ええもんがあったわ。ほらキビ団子」

桃「ありがとうございます」

2 「おおわしもちょうど持っとなわ、キビ団子」

桃「なんでこんなキビ団子もってんの」

1 「わしもあったわ」

桃「すみません。ありがとうございます。じゃあ頂きます」



桃太郎、キビ団子を食べる。

桃「おいしい。おいしいです」

1 「うまいやろ」

桃「はい」

2 「空腹が一番のスパイクやけんな」

3 「空腹スパイク」

1 「回転レシーブ」

2 「おっ、ナイスレシーブ。よし。トス」

1 「、、、一人時間差あ！」

3、すでにブロックに飛んでいてタイミングをずらされる。

3 「くそそう！ 悔しい！」

なんか、盛り上がって笑ってる。

1 「ガンちゃんもなんかあげたらどうや」

これまでずっと端っこの方で白い粉を吸っていたガンちゃん。

桃「いや、いいですよいいですよ」

ガンちゃん「(粉を吸う)」

桃「なんか吸ってるなんか吸ってる」

ガンちゃん「(眼は逝ってる)」

桃「眼が逝っちゃってるよ」

2 「ガンちゃんもなんかくれるみたいや」

3 「めづらしな」

桃「いっすいっすいっす」

ガンちゃん「(声小さい)」

桃「え、なんて？ 声ちっちゃいな」

ガンちゃん「(白い粉くれる)」

桃「あ、ありがとうございます」

ガンちゃん、急に空気の匂いを嗅ぎだす。

桃「なに？ なに？」

ガンちゃん「(大きな声で)炊き出し、来た！」

1・2・3「ホンマか！」

ホームレス、「急げ」だの「今日のおかずはなんだろう」だの、口々に喋りながらはけていく。

桃「え」

S 6 シンガーソングライター。ASUKA。

取り残される、桃太郎。

そこに聞こえてくる、曲。

♪ピーチボーイ、ピーチボーイ

お腰につけたキビボーイ(チェリーボーイ)

ひっとつゝ私に once more again ♪

アスカ「そう、悲しい顔しなさんな」

桃「俺、悲しい顔してました？」

アスカ「just away」

桃「ん」

アスカ「まあ、いいってことよ」

桃「なるほど」

やや間

♪ピーチボーイ、ピーチボーイ

お腰につけたキビボーイ(チェリーボーイ)

ひっとつゝ私に once more again ♪

桃「あ、キビ団子欲しいんすか？」

アスカ「なんで、そう思うの？」

桃「え、いや。何となく。曲を聴いて」

アスカ「そう。曲を聴いたら思いは伝わる。それが例え言葉の通じない相手でもね」

桃「鬼でも、ですか？」

アスカ「そうよ。鬼でもよ。鬼でもよ。(桃「なるほどお〜」)音楽は soul だ。そして、私は、soul を伝える人。つまり solar」

桃「solar」

アスカ「そう。solar」

桃「太陽、じゃないですか？」

アスカ「そう。音楽は魂であり、魂を伝える私は太陽だ」

桃「なんか、かっこいいっす」

アスカ「私の魂。伝わったかな？」

桃「ええ。キビ団子が欲しいんすよね」

アスカ「チッ。チッ。チッ。キビ団子なんかいらないよ。私が欲しいのは、そう。愛」

やや間

桃「あいにくですが、手持ちがキビ団子しか——」

アスカ「そういう時もあるっつもんや my little Saturday night」

桃「すんません」

アスカ「Sunday morning」

桃「え、キビ団子、欲しいんじゃないんですか？」

アスカ「欲しい」

桃「あ、そうっすよね。どうぞ」

アスカ「ありがとう。My God Father」

桃「あ、じゃあ、俺、そろそろ」

アスカ「一緒に行こう。Going my way」

桃「そっすね」

桃「シンガーソングライターは一緒に行こうと言って、300m くらいの角を、右側に全力疾走していった。さらばアスカ。またどこかで逢う日まで。俺がお前を照らす Solar になる日まで！そして俺は鬼ヶ島行きの船に乗り込んだ！」

S 6 船の上のシーン

舟に乗る桃太郎。船頭。

船酔いする桃太郎。

船頭「大丈夫かい、兄ちゃん」

桃「舟ってこんなゆれるんすね」

船頭「全然ゆれてねえよ、こんなん」

桃「ううえええ」

船頭「あ、ちょっと。船にかかっとるやんか」

桃「すんません」

船頭「どないしてくれんねん。これ、けっこうすんねんで」

桃「ほんとすんませ、ううえええ」

船頭「おま、何やっとなねん自分。人のものにグロかけて。やめい言っとんねん」

桃「すんません」

船頭「謝ってすむんか？」

桃「いえ」

船頭「謝ってすむんか言うとなねん」

桃「いえ、すまないです。ううえええ」

船頭「耐えい！」

桃「(なんとか耐える)」

船頭「どうするんや」

桃「え」

船頭「こういう時。大人ならどうするんや言うとなねん」

桃「本当に、申し訳あり」

船頭「ちゃうやろがい」

桃「え、どうすれば」

船頭「自分で考え。それが大人や」

桃「え。わかんないっす」

船頭「なんやねん自分。なんやねん自分。なんやねん自分」

桃「すんません」

船頭「575やろが」

桃「え」

船頭「大人なら今の心情を575で詠むんやろが」

桃「まじっすか」

船頭「せや。そしたら俺が77つけたるがいな。これで和解や。民法上でそう決まっとんねん。わかつたらさっさと詠みい！」

桃「船酔いで・船にグロかけ・まじごめん」

船頭「ええねんええねん・気にしたらアカン」

やや間

船頭「ええやんか。見直したで」

桃「ありがとうございます。なんか自信がついてきました」

船頭「それがいい。自信あるのが一番いい」

桃「あ、俺、これから鬼ヶ島に行くんです」

船頭「まあ、鬼ヶ島行きやからな」

桃「・・・」

船頭「なんやねん」

桃「いや、自信つきました」

船頭「それが一番いい」

やや間

船頭「あかん。霧や」

桃「気がついたら周りには濃い霧が立ち込めていた。なんか天気悪いつすねえ」

船頭「何のんきにしとんねん。気をつけや。鬼の領域に入ったんや」

桃「えじゃあ、もう鬼ヶ島ですか？」

船頭「この霧を抜けたらな。この霧は通称、竜の巣や」

桃「ラピュタだ」

船頭「もう見えるで」

桃「どこっすか？」

船頭「あそこや。あれが鬼ヶ島や」

桃「あれが、鬼ヶ島」

船頭「どうや」

桃「怖いつす。なんか鬼ヶ島が予想より鬼ヶ島鬼ヶ島していて、やばい感じがします」

船頭「あそこは地獄や。お前は今からあんなところに行こうとしてんねんで」

桃「・・・」

船頭「どうや、今ならまだ間に合う。引き返せるで」

桃「いや、進んでくださいおやっさん」

船頭「なんでや」

桃「俺、変わるんや。今のままじゃあかんのや」

船頭「ホンマに行くんやな」

桃「はい」

船頭「もう戻れへんで」

桃「行ってください！ おやっさん！」

船頭「よっしゃ！ これに乗ってけ！」

桃「・・・なんですかこれ？」

船頭「小型船や。自分でこいで行き」

桃「え、おやっさんが連れて行ってくれるんじゃないんすか？」

船頭「んなわけあるか、アホ。鬼ヶ島がどんどころか分かつてるんか自分。わしにはな、家族がいるんや。お前なんかのために命ははれん！」

桃「おやっさん！」

船頭「わしが出来るんはここまでや。がんばりいや」

桃「おやっさん。今までありがとうございました！」

## S 7 鬼ヶ島へ上陸のシーン

桃「おやっさんの船を降り、小型船に乗り込んだとたん、魔法のように船酔いが収まった。あの船酔いはおやっさんの運転の粗さによるものだった！ そう気が付いて振り返った時にはもうおやっさんは霧の向こうに行っていた。なんてことだおやっさん。なんてことだ桃太郎。でも、そんなおやっさんには恨み言の一つっぼちも出てや来なかった。むしろ俺は、感謝していた。おやっさんのおかげで俺はちょっと変わったような気がした。季語をちりばめた575によって、大人の階段をちよつと上った気がした。大人になるってこういうことなんだなって感じがした。今ならコーヒーをブラックで注文できそうだった。そういうしている間に、あれよあれよと小舟は鬼ヶ島に吸い込まれ、桃太郎は鬼ヶ島に降り立った！」

どっかーん。噴火。

桃「ここが鬼ヶ島。そこは島というにはあまりにも荒廃していた。いくなれば地獄。ここは地獄だ。地獄絵図の中には人っ子一人、いなかった！」

T「チェキー！ 今日も頑張っていきましょう。（Y「よっ」）さあ、本日の動画は『鬼ヶ島に、上陸してみた！』（Y「パフパフ」）」

桃「どこの YouTuber」

T「あ、桃太郎さんじゃないっすか」

Y「奇遇にも桃太郎さんと鉢合わせました！」

桃「ここは君らのような素人が来るような場所じゃない。今すぐ帰ったほうがいい」

T「どうしたんすか桃太郎さん。意識高くなっちゃって」

Y「若干うざいっすよ」

桃「いろんな人に会って自信がついたんだ。鬼退治はプロの桃太郎、プロ太郎に任せて、君らは村で待ってるんだ」

Y「わかってないっすね桃太郎さん」

T「わかってないわかってない」

桃「何が？」

Y「素人だから出来る面白さって言うのもあるんですよ」

T「さすがさすがさすががぁ！」

桃「大火傷じゃないか」

鬼たちが出てくる。

鬼1「なんやねんなんやねん」

鬼2「どないやねんどないやねん」

鬼1「なんやねん自分ら。観光か！」

桃「鬼だ」

Y「本当に鬼がいました！」

鬼1「なに鬼みてテンション上がとんねん！ 今後鬼しか出てこうへんわ！」

桃「俺は鬼退治に来たんや！」

鬼2「完全に観光装備やないかい！」

桃「それは・・・」

鬼1「危ないで自分ら。人間やのに」

Y「鬼に心配されてますよ桃太郎さん！ 鬼に心配されてますよ！」

鬼2「危ないなあ」

鬼1「うん。その装備じゃ危ない」

桃「え、そんなっすか？」

鬼1「なめとるなめとる鬼をなめとる」

桃「え、え、でもしょうがないっしょ！ なんか流れて来ちゃったんだから！」

鬼1「なんやねんなんやねん開き直つてに」

鬼2「捕獲や！」

ストックキングを顔にかけて捕獲する。

桃「やめろ！ やめろ！」

Y・T「これや！ これが素人の面白さや！」

桃太郎たちは、ボスのところに連れていかれるのである。

S8 ボス鬼、登場！ それは父のシーン

ボス鬼、浅野を連れてくる。

ボス「段差があるから気をつけろよ！」

A「ありがとう。てか、なんなん。なんでウチなん？　そして、なんで大根なん！」

ボス「その拘束具を解くことは、伝説の剣でもない限り、絶対に不可能！」

A「伝説の剣？」

鬼たちが桃太郎を連れてくる。

鬼1「ボス！　侵入者を連れてきましたぜ！」

ボス「拘束を解いてやれ！」

ストッキングから解放される。

A「桃ちゃん！」

桃「浅野！　なんでここに！」

A「全然わからん！」

ボス「よくここまで来たな。太郎」

桃「俺は太郎じゃない。桃太郎だ」

ボス「それでもいい」

桃「あんたが鬼さんの親玉か」

ボス「いかにも」

T「さすが親玉だぜ。風格が違う」

Y「お、オーラが。オーラがなんか凄い！」

ボス「そうオーラ。ノルウェーにいるようだろう。おっとそれは、オーロラ」

やや間

T「さすが親玉だ！」

桃「強い！　強い精神力だ！」

ボス「どうだ。お前に出来るか太郎」

桃「桃太郎だ！　桃太郎だけど、それは出来ない！　俺にはできない。勇気が足りない！」

T「桃太郎さん。あんた分かってないなあ。人間勇気がある無いじゃない！　やるかやらないかだ！」

桃「youtuber-」

Y「俺ら、そういう戦場で生きてるんで」

桃「お前がそれ言う？」



T「まあ、見とってください」

桃「youtuber」

T「やい！ お前が鬼の親玉だな！」

ボス「いかにも。たこにも」

やや間

ボス「ぶふあ！（小ダメージ）」

T「この攻撃が決定打にならないことは想定済みよ」

ボス「ぶふふ。なかなかやる」

桃「すごい、すごいぞ youtuber」

Y「伊達に底辺やってねえっすよ」

T「俺の番だ」

ボス「かかってきなさい」

T「行くぞ行くぞ。吉幾三（♪おらこんな村いやだ〜♪）」

やや間

T、瀕死。

T「桃太郎さん。人間勇気がある無いじゃない！ やるかやらないかなんやで、」

桃「youtuber」

Y「さあ、桃太郎さんの番です」

桃「この後やりずれえよお」

ボス「さあ来い」

Y「あ、あいつ、今のやり取りを、何も言わずに見届けてくれるなんていい奴なんじゃないですか！」

T「あいつは、いいやつだ」

ボス「これがいわゆる横綱相撲。お前らの出方を見てからぶちのめす。それほど俺とお前らとの間には差があるのだ」

T「さすが鬼のボスだ」

Y「奴がキングデーモン」

桃「自分が生まれ育った川の香りを忘れない。おっとそれはキングサーモン」

やや間

桃太郎、大ダメージ。

桃「はあ！ はあ！ あ！ あひい！ ああああ！」

T「大丈夫ですか、桃太郎さん！」

Y「桃太郎さん！」

桃太郎、ガンちゃんから貰った薬を吸う。ギリギリのところに戻ってくる。

桃「危ない！ 危ないところだった。危うく人じゃなくなるところだった」

ボス「今のを耐えたか。伊達に鬼退治に来ているわけではなさそうだな」

桃「そうさ。俺は遊びで来てるわけじゃないんだ。長い旅の中で俺は若干成長している」

ボス「それが無駄な努力だという事を思い知らせてやろう」

Y「何をやる気なんだ！」

ボス「闇のゲーム！」

ゴゴゴゴゴゴ。揺れる。

S10 白熱した戦いのシーン

ボス「第1回戦！」

鬼2「ババン！」

桃「第1回戦だと！ 第1回戦という事は少なくとも第2回戦があるという事だ。しかし論理的に考えて、偶数番で勝負するというのはチャンチャラおかしな話！ これは、奇数だ！ 奇数で勝負する気だ！ 考えろ。考えろ桃太郎。もうすでに戦いは始まっているといっても過言ではない。論理的に考えろ。これより先は少しのミスで精神が崩壊しかねない。2以上だ。2以上の奇数だ。奴らの人数的にもそんなに大きな数ではないことは明らかだ。つまり、2以上の最小の奇数。これだ！ 2以上の最小の奇数だ！ となると3！ こいつら、少なくとも3番勝負をするつもりだ！」

ボス「よく論理で、心理までたどり着いたな太郎。そうだ、この戦いは3番勝負だ」

桃「俺は桃太郎だ」

ボス「第1回戦「激辛シュークリーム！」」

揺れる。

鬼2「(ルールの説明) さあ！ ここに用意した3つのシュークリームのうち1つにだけ激辛ソースを注入する！ 激辛を食べたら最後、口内環境が地獄になる！ あまりにも危険なため、鬼ドクターから「飲むヨーグルト」を置いておくことを義務付けられた！ ただしこれは闇のゲーム！ 蓋は開いていないぞ！」

桃「飲むときに大変じゃないか！」

鬼2「さあ、この恐怖のゲームに参加するのは誰だ！ 鬼コーナーから名乗りを上げたのは「ゲキカラ・デ・チャンジャ」（マイクパフォーマンス）。桃太郎コーナーは誰だ！ 誰が来るんだ！」

Y「俺がいく！」

T「こっしー」

Y「待っててくれ、ジュリジュリ」

T「ダメ、私も行く」

Y「ダメだ危険すぎる」

T「今まで一緒にやってきたじゃない！」

Y「そうだなジュリジュリ。俺らが二人集まったら百人力だな！」

T「そうよこっしー。二人いれば百人力よ！」

鬼2「さあ、一人一個づつシュークリームを持つんだ！」

桃「待つyoutuber！ 不利になってる！ 不利になってるって！」

Y・T「二人そろえば百人力！」

鬼2「それじゃあ準備はいいか！ それじゃあ行くぞ！ よおしいファイト！」

Youtuberと鬼1食べる。

勝敗はだれにもわからない。

Youtuberは負けなければならない。鬼は辛いのが得意。

※鬼側が引いたら、強くなる照明IN。めっちゃ強くなる。鬼1「もともと勝ち目なんてなかったんだよ！」

鬼2「勝負あった！」

桃「youtuber！」

鬼1「ヨーグルトでも飲んでな！」

鬼2「勝者、鬼コーナー「ゲキカラ・デ・チャンジャ」

桃「今思えばなんて辛いのが強そうな名前なんだ」

ボス「これでコチラが1点先取だな」

桃「くそ。二人で行くからもう俺しかいない！」

ボス「第2回戦！」

桃「ちよっと待って！」

ボス「シンプルに腕相撲！」

桃「ええ！」

ゆれる

Y「俺らはもう無理っす桃太郎さん」

T「あとは任せました」

鬼2「鬼コーナーからは、20年前、その腕つぶしだけで鬼を壊滅させた伝説の人間！  
「(名前)」！」

桃「人間！ あいつなら勝てそうだ！」

Y・T「頑張ってください！ 桃太郎さん！」

相手は人間。

桃太郎、戦う。負ける。

骨が折れる音。

鬼1「勝者「(名前)」！」

桃「腕が！ 腕が！」

ボス「さあ、これは3番勝負」

桃「もう勝っているというのに、3番勝負にこだわるというのか！」  
ボス「第3回戦「ワサビ寿司早食い対決」！」

ゆれる

桃「3番勝負の中で、激辛がかぶってやがるだど！」

鬼2「この対決は3対3で行う闇のゲームだ！」

桃太郎「3対3。俺もyoutuberも、こんな状態じゃ、戦えない。ダメなのか。ここまで来たのにダメなのか！ (あきらめかける桃太郎)」

3人の声「待ちな！」

そこに現れる、船頭とガンちゃん ASUKA。

ボス「誰だお前は」

桃「船頭(おやっさん)！ ガンちゃん！ ASUKAー！」

3人「(各々ワサビが得意なアピール)」

桃「なんて心強いんだ！」

鬼2「リレー方式で一人一個寿司を食べる！ ただし、各チーム一つだけ寿司にワサビが入

っている！ 仲間を疑い疑心暗鬼になって最終的には発狂する、闇のゲームだ！ 両チー  
ム前へ！」

三人が猛烈に戦いに勝つ。  
ボスを倒す。

喜ぶ桃太郎たち。

そこへスゴイ音響・照明

A父、登場。

A父「何負けとんじゃい！」

共食いしてパワーアップ。

A父「わしの部下によくやってくれたのう。3人出てこいや！」

引力を使い3人を前に引き出す。

A父「コンテンポラリーダンスバトルや。ミュージックスタート」

A父とガンちゃんたち3人がコンテンポラリーダンスバトルをし、瞬殺される。

S12 鬼を倒すシーン

A父「勝負あったのう！」

桃「みんな！」

3人「俺たち（私たち）に出来るのはここまでだ（よ）」

桃「ありがとう皆。みんなのおかげで俺も若干成長したんだ！ だから俺ももうちょっと頑  
張んなきゃって感じなんだ！」

A父「まだやろうというのか、その観光装備で」

Y「桃太郎さん！ これです！」

Y、カバンを渡す。

桃「そうか！ そういえば、ずるいぞ鬼！」

A父「何がだ！」

桃「よくよく考えたら、勝負の内容はいつつもそっちが決めてるじゃないか！」

A父「確かに。そういわれてみればそのとおりだ」

桃「今度は俺たちのゲームで勝負させてもらおう！」

A父「いいだろう！ 何をするつもりだ」

桃「これだ！ 黒ひげ危機一髪！」

鬼2「黒ひげ危機一髪だと！」

鬼1「なんなんだあのゲームは！」

鬼2「そうか。お前はまだ若いから知らないか。あのゲームは、150年前に大流行し、その結果大量の死傷者を出し鬼政府によって禁止にされた、闇のゲームだ！」

鬼1「なんだって！」

桃「この黒ひげを、浅野に見立てて勝負だ！」

ゆれる。

桃太郎とA父のタイムンバトル「黒ひげ危機一髪」。

黒ひげ危機一髪して、桃太郎が勝つ。

桃「大丈夫か浅野！」

A「桃ちゃん」

桃「帰るぞ！」

桃太郎、自転車を用意する。

A、その場に立っている。

桃「どうしたんや」

A「ありがとう」

桃「、、お、おう。はよ乗れや！」

A「命令すんなやアホ！」

チャリで逃げる。

S13 親父を倒し、Aを取り戻す桃太郎。

鬼たち「まてえ！」

後ろからミサイルを打ってくる鬼たち。逃げる桃太郎。

桃「なんでこんなにミサイルが飛んでくるんだよ！」

A「お父さん、サバゲーが趣味だから」

桃「脚がつるー！」

A「はやくはやく！」

桃「ちょっと上り坂、やばい！ 降りて、ちょっと降りて」

A「え、なんでよあんたがおりなさいよ！」

桃「は、なんでだよ、は？ 俺の自転車だろうがよ」

A「鬼ヶ島に行ってる間貸してくれるんでしょ！」

桃「やばいやばい」

A「きゃー！」

爆発。

桃「クソー！」

A「マジの爆発じゃん！」

桃「浅野！」

A「え？ なに？」

桃「好きだー！」

A「なんて？」

桃「好きだー！」

A「えーなんて？」

桃「好きだー！」

A「きこえなーい！」

桃「うおおお！」

爆発音の中、溶暗

(めでたしめでたし)